

トルンの町の名の起こり



何百年も前の昔のこと、ヴィスワ川の曲がりくねった所に町が建ちました。町の住民たちは、川の流れの湾曲部での急激な変化がもたらす危険を恐れ、安全な状態で暮らせることを切に願っていました。それで町を城壁と塔で囲んで護ることになりました。

建てられた塔のうちの一つが、自分のそばを流れる川と話をすることが好きになりました。

「大好きなヴィスワさん、わたしはあなたがうらやましいわ！ あなたは山々を通り過ぎ、谷間を通り過ぎ、町々や村々を通り過ぎて海に注ぐまで流れてゆくのよ、わたしはここに立ったままで退屈しているのよ」と哀れな塔は話しました。

「それは本当ね。わたしはあなたに同情するわ。わたしは面白い場所ばかり眺めているから、一度も退屈したことなんかないわ」とヴィスワは答えました。

多くの時間が流れました。ヴィスワの生活はますます楽しくなってきました。川は途中で見たことをいつも塔に話して聞かせました。しかし、まもなく塔は自分の友達の話を聞くことを喜ばなくなりました。塔は川に、話を止めてくれるように、頼みました。しかしヴィスワは塔に無理やり自分の話を聞かせようとしました。それでヴィスワ川の波はますます強く塔の外壁を洗いました。塔は傾きはじめました。「ヴィスワさん、止めて！ 止めて！ 倒れちゃうよ！（ルネン rune）」捨て鉢になって塔は叫びました。「ならば、倒れよ！（ト、ルン To ruń）」とヴィスワは答えました。

ちょうどその時、二人の商人が旅をして町に近づいてきました。遠くから町の城壁と塔が見えました。



ヴィスワ川とトルンの城壁の塔
Legendy Toruńskie, «Literat», Toruń, 2007 より

「あれは何という町なのだろうね？」と二人は興味をもって、尋ねるように、口をそろえて言いました。「ト、ルン！（ならば、倒れよ！）」というヴィスワの言葉がこだまとなって二人の耳に響きました。

「トルンだとさ」

こうして「トルン」がこの町の名となりました。

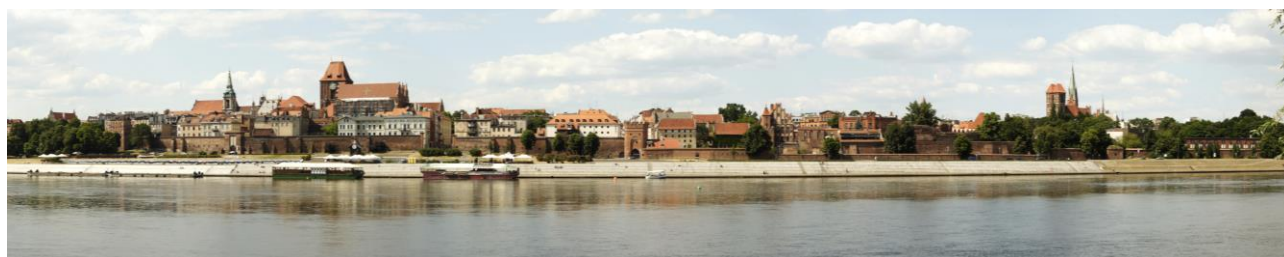


Toruń (トルン) の町名の起源を説明する民衆による民間語源説です。

「ト to」は「それならば」という意味の接続詞、「ルン (ルニ) ruń」は「ルノンチ runąć 倒れる」という動詞の命令形 (2人称単数) です。

「ヴィスワ川 Rzeka Wisła」、「塔 baszta」は共に女性名詞で、擬人化されると女性になります。

栗原 成郎 (東京大学名誉教授)

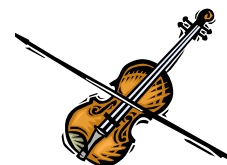


ヴィスワ川よりトルン旧市街 (左) と新市街 (右端) を望む (ウィキペディア日本語版より)

連載《都市の伝説》トルン 2



いかにだし 筏師と蛙たち



昔々、洪水が起こってトルンの町に蛙の大群が流れ着きました。町のいたるところ、蛙であふれました。街の通りにも、民家の中にも、旅籠(はたご)の中にも、市庁舎の大広間の中にも蛙がいました。町の住民、商店主たちは憤懣(ふんまん)やるかたなしです。町の中は住みにくくなりました。市民は、市長が責任を取るべきだ、と考えました。苛立(いらだ)った市長は、忌まわしい蛙たちを始末するように、全市民に命じました。しかし、残念ながら、蛙は人々の手に負えませんでした。

そこで、市長は布告を出しました。

「我々の町を蛙から解放してくれる者は、英雄となる。その者に余は余の娘を妻として与え、かつ莫大な財産を与える」

多くの志願者が現れましたが、蛙を始末することができた者は一人もいませんでした。

ある日、町に筏師のマテウシュが筏に乗ってやってきました。たいへん貧しい男でしたが、かねてから市長の娘のマルタにぞっこん惚れていました。

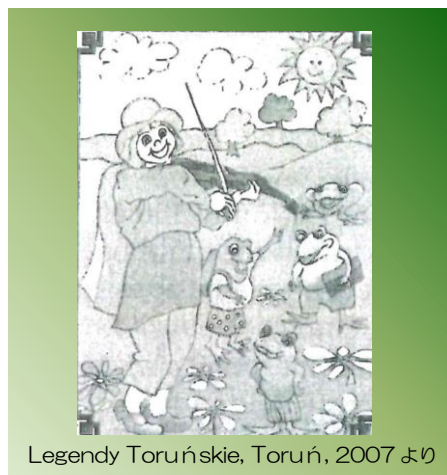
「わたしが町を蛙から解放してみせます！」と彼は約束しました。

みんなは筏師を馬鹿にして笑いました。彼を信用していなかったのです。筏師は旧市街の広場に出て、バイオリンを弾きはじめました。素晴らしい演奏でした。「この若者のバイオリン演奏はじつに見事なものだ！」



Pomnik flisaka

トルンの旧市街にある筏師の像



Legendy Toruńskie, Toruń, 2007 より

聴いていて何と楽しいことか！」人々は感嘆の声を上げました。

蛙たちもマテウシュの奏でるメロディーにたちまち魅せられてしまいました。蛙たちは彼の周りに集まってきました。若者は最後の一匹の蛙が、ゲロゲロ鳴いている仲間の群れに加わるまでバイオリンを弾きつづけました。そこで筏師は、ゆっくりとヘウム門の方向へ動きはじめ、門を抜けて町の外にある沼まで来て、やっと止まりました。そこは蛙たちの理想郷でした。音楽は鳴り止みましたが、蛙たちはその沼にとどまりました。「あの筏師は素晴らしいことをやってのけたものだ！良い考えを思いついたものだなあ。何よりもありがたいのは、われわれが忌まわしい蛙どもから解放されたことだ」市民は称賛を惜しみませんでした。

「余は喜んで約束を一刻も早く果たそう。筏師に褒美をつかわし、娘のマルタを与えよう」と市長は言いました。

婚礼の祝いは七日七夜続きました。マルタとマテウシュは末永く幸せに暮らしました。二人のあいだに七人の子供ができました。

* * *

トルンはヴィスワ川によるグダンスクまでの丸太浮送ルートの拠点で、筏師たちの休憩場所として知られました。旧市街の聖ヤン(ヨハネ)大聖堂の時計は中心街の方角ではなくヴィスワ川の方を向いて、筏師たちに時を知らせました。町を蛙の災害から救った筏師の名は、イヴォとも言われます。

栗原 成郎(東京大学名誉教授)

トルンの斜塔

—— 修道騎士の罪 ——

何百年も前の昔のこと、トルンのドイツ騎士団の城の中に 12 人の十字架の騎士が住んでいました。そのうちの一人は際立って眉目秀麗(びもくしゅうれい)な青年騎士でしたので、町の多くの娘たちが彼を好きになりました。しかし娘たちのうちの誰一人として騎士の心を動かす者はいませんでした。

ある日、十字架の騎士がトルンの町を散歩していたとき、たいへん見目うるわしい乙女がふと彼の目に留まりました。騎士は一目見ただけで娘が好きになりました。美しい娘のほうも若い騎士が好きになりました。そして二人は毎晩ひそかに逢瀬(おうせ)を楽しむようになりました。

ある時、トルンの町の人々は二人の恋愛に気づき、憤慨(びんがい)しました。

「修道士ともあろう者が娘と逢引きするなんて許せないわ！」花売り女のマリーナが叫びました。

「騎士と娘を処罰(じょばつ)すべきだ！」肉屋のバズィリが

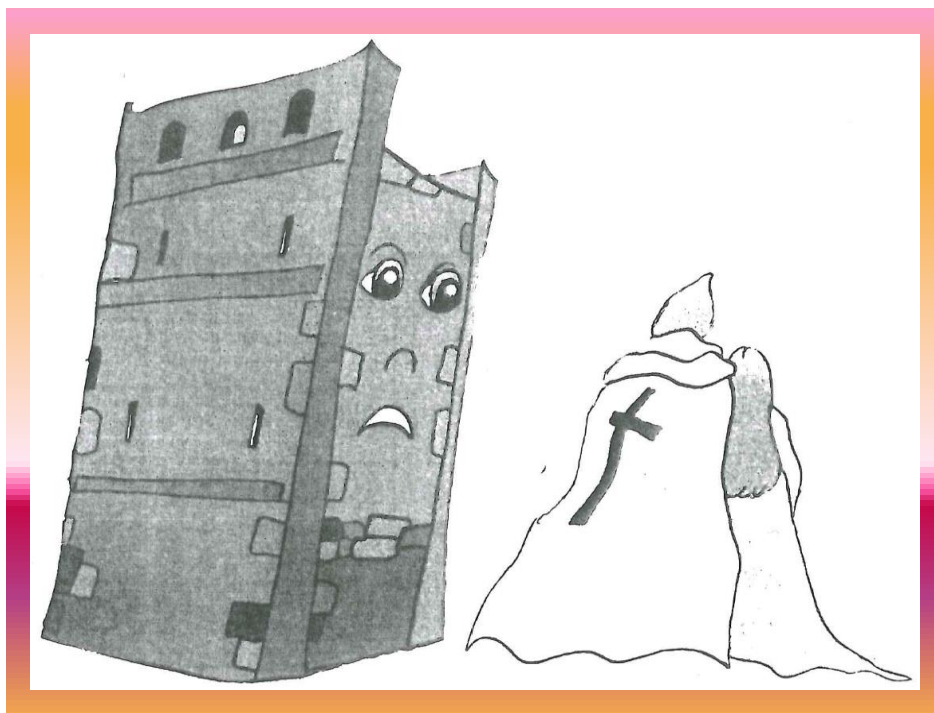
要求を出しました。

二人のうちのどちらのほうに罪が重いのか、いろいろ審議(しんぎ)が行われました。その結果、両者ともに罪がある、と確認(確認)されました。娘には鞭打ち(むちうち)の刑が宣告(せんこ)され、修道士には、彼の生活(せいご)が曲(まが)っていたように、曲(まが)った塔(た)を建設(けんせつ)する労役(らうえき)刑(けい)が科(け)せられました。

そのようにして曲(まが)った塔(た)が建てられ、それは今日(こんにち)もトルンの「斜塔 Krzywa Wieża」として残(のこ)っています。

伝説(でんせつ)によれば、自分に罪(つみ)が無いことを斜塔(しゃた)で確か(たしか)めることができるといひます。そのためには、まず塔(た)の下(した)に立(た)って、背中(せなか)を壁(かべ)につけ、両手(りょうて)を真(ま)っ直(ちか)ぐ前(まへ)に突き出(突きだ)すように伸(の)ばしなす。もしその姿勢(しせい)でしばらくのあいだ立(た)っていられば、罪(つみ)が無いことになりなす。

栗原 成郎(東京大学名誉教授)



Legendy Toruńskie, «Literat», Toruń, 2007 より

トルンのピェルニク焼き職人と その娘カタジーナ

トルンは昔から最もおいしいピェルニク(piernik 蜂蜜、香料、生姜を加えて焼いたクッキー、英語 ginger bread, spice cake)で有名です。ピェルニクを焼く職人はたくさんいましたが、一番おいしいピェルニクを焼くことができた職人はたった一人でした。その職人は謙虚で、たいへん善良な人でした。彼にはカタジーナ(Katarzyna: 愛称カーシャKasia)という愛娘がいました。娘のカーシャは喜んで父の仕事の手伝いをしていました。

ある時、菓子職人は重い病気にかかりました。彼の家に不幸が訪れました。菓子職人は娘に言いました。「カーシャ、わたしに代わっておまえにピェルニクを焼いてもらわなければならなくなったよ」「いいわよ、お父さん、わたしがピェルニクを焼くわ。でも、お父さんのピェルニクのような上等なピェルニクはできそうもないわ」と娘は答えました。「おまえなら、きっと、うまく行くよ」と父は娘を慰めました。

カーシャはパン生地をこねましたが、ピェルニクをつくる型が見つかりませんでした。新しい型を準備する時間はありませんでした。それでカーシャは手近にあった錫(すず)製のカップを取って、パン生地(きじ)から円形のメダルのような型を切り抜きました。それらを六個ずつ並べて鉄板の上に置き、オーブンの中に入れました。焼きあがると、変な形のピェルニクが出来あがりました。六個がくっついてしまったのです。カーシャは、こんな形のピェルニクは誰も買ってくれないのではないかと心配になりました。しかし、それは取り越し苦労でした。ピェルニクはその日のうちに全部売り切れてしまいました。「見事なピェルニクだ！ それに形が素晴らしいね！」と商人のミハウが大きな声で言いました。「わたしが自分で焼いたの。お父さんが病気なので」とカーシャは小さな声で答えました。

「きみのお父さんが焼いたピェルニクよりもずっとおいしいよ」とトルンの町の人々は声をそろえて褒めました。

トルンの町の人々は、カーシャの焼いたピェルニクがどうしておいしいのか、長いあいだ不思議がりました。「おいしいピェルニクだ！ カーシャはパン生地は何を入れたのかな？」「蜂蜜とスパイスのほかにはわたしがパン生地に加えたものがあります。父に対するわたしの愛情のすべてを入れたのです。それがわたしのピェルニクの味の秘密です」

カタジーナの名誉を讃えてピェルニクは「カタジンキ katarzynki」と名づけられました。その味は何年もたった今も変わっていません。一度ご自分の舌で味を見ていただければ、納得がいくでしょう。

栗原 成郎



ピェルニクを焼くカタジーナ

〈後援イベント〉 札幌コンサートホール *Kitara* のバースデイ〈オルガンシリーズ〉

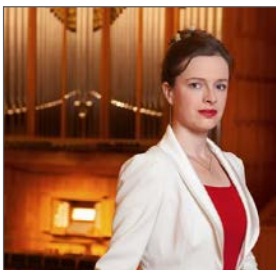
～*Kitara* 開館記念日をオルガン、ヴァイオリン、合唱で華やかに祝う～

会場: 札幌コンサートホール *Kitara* 大ホール(中央区中島公園1-15)

日時: 2015年7月4日(土) 15:00 開演 14:30 開場

料金: 全席自由(税込)500円

出演: オルガン/マリア・マグダレナ・カチョル(第15代札幌コンサートホール専属オルガニスト/ポーランド出身)、ヴァイオリン/大平まゆみ(札幌交響楽団コンサートマスター)、合唱/札幌市内中学校合唱部



(参考)その他のカチョルさんの演奏会 ©サントリーホール オルガン プロムナードコンサート 2015年6月25日(木)12:15～12:45(12:00 開場)入場無料 サントリーホール大ホール 問合せ 0570-55-0017 ©パイプオルガンとリードオルガンコンサート 2015年7月11日(土)14:00～ 旭川豊岡教会(0166-33-9522)料金1,200円